

心の芽

小川未明

青空文庫

ある日、どこからか、きれいな鳥が飛んできて、木にとまりました。腹のあたりは黄色く、頭が紅く、長い尾がありました。野鳥のように、すばしこくなく、人間になれて、いるらしく見えるのは、たぶん飼われていたのが、かごを逃げ出したのかもしれませんが。みんなが、大騒ぎをしました。大人も、子供も、どうしたら捕らえられようかと、木の近くへ集まりました。正吉は、胸がどきどきして、自分が捕らえようと、心にきめると、みんなにむかつて、

「あの鳥は、おれのものだ。わあわあいつちやいけない。」といって、彼は、すぐ鳥のとまつているかきの木に登りはじめました。

鳥は、そんなことにまつたく気づかず、さものんきそうに、あちこちと景色をながめていました。見ている人たちの中には、うまくつかまればいいがと思ったり、あるいは、早く逃げればいいのにと思ったり、てんでになにか考えていたであらうが、とにかくだまつて、正吉のすることを見まもっていたのです。

正吉は、木の幹の蔭で、なるたけ自分のからだを隠すようにして、音をたてずに、ねこがねずみをねらうときのようすそっくりで、すこしずつ鳥にしのびよって、もう一

息きというところまで達たつしました。そこで考かんがえていた彼かれは、おそろおそろ手てをさしのべたのでした。

「うまくいったぞ！」と、見みている人ひとの中から、いったものもあります。

しかし、あまり鳥とりが美しいので、つかまえる手てがにぶったか、指ゆび先さきが、尾おにふれんとした瞬しゆん間かん、急きゆうに鳥とりは、おどろいて飛とび立たちました。そのとき、正しょう吉きちのからだも、いっしょに木きからはなれて、空くうでもんどり打ち、地ち上じやうへと落おちました。

「鳥とりには羽はねがあるが、人にんげんにはないものを、なんで、手てづかみができるものか。」と、こんどは、見みていた人々ひとびとは、口々くちくちにのしりながら、氣きを失うしなな子供こどものところへ駆かけつきました。そして、だき起おこして介抱かいほうするやら、親おやたちを呼よびにいくやら、あわてふためいたのであります。

この村むらには、専門せんもんの医い者しゃがありませんでした。内科ないかと外科げかを兼かねた頼たよりげないものしかなかったので、治ちりよう療りやうにも無む理りがあつたか、正しょう吉きちの折おれた右脚みぎあしは、ついにもとのごとく、伸のびずにしまりました。それから、不具かたわとなつた少年しょうねんは、友ともだちからばかにされたり、わらわれたりしたのであります。

彼かれは、ろくろく学がっこう校こうへもいかず、早はやくから、町まちの縫ぬい箔屋はくやへ弟子でし入りして、手仕てしごと事をと

おぼえさせられたのでした。生まれつき器用の正吉は、よく針をはこびました。

「正吉、この金紗の羽織は、仕損じぬよう、念を入れてしなよ。」というように、主人は、注意しながらも、上等のむつかしい品をば選んで、彼に扱わせるようにしました。そして、でき上がりを見て、いつもほめたものです。

だから彼は、いつからともなく、ほかの弟子たちを抜いて、仕事の上では、主人の代わりをしていました。この店は、町で古くからの縫い箔屋だったので、金持ちの得意が多く、また遠くからも、注文を受けていました。

しかし、なんによらず、世の中のこととは、いつも同じような調子でいくものではありません。いろいろの関係から、たえず変化していくものです。これまでも、新しい器械が発明されたとか、新しい思想が流行するとか、また、戦争などということがあつて、栄えた職業が、急に衰微したり、また反対に衰微していたものが、復興する例は少なくなかったのです。

こんどの世界戦争は、我が国のすべての産業に革命をもたらしました、縫い箔屋という商売が、たとえ一時的にせよ、まったく衰える状態となり、この店もついに閉店して、転業を余儀なくされたのでした。

ここにいた、若い、健康な男女は、それぞれ工場へいき、活潑に働いたので、正吉は、それらの人たちと同じことはできず、ある電気工場へ勤めて、体力にふさわしい仕事として、ニクロム線を巻いたり、鉄板のさびを落したりしていたのであります。

ある休みの日に、正吉は、前に奉公していた、縫い箔屋を訪ねました。主人は喜んで迎えてくれました。主人も、まだ老人とはいえぬながら、もはや工場へいつて働ける年ではなく、さればといつて、ぼんやり、その日を暮らす気にもなれず当惑している、ちょうど総選挙前で、筆耕をたのむものがあつて、そんなことをしているのです。

「すこしの間に、世間もだいぶ変わったものだな。」と、主人は、いまさらのように、腕を組んでいいました。

「はい。」と、正吉は、答えました。

「こんどから、おまえにも選挙権があるんだね。りっぱな人間一人前になれたというものだ。だから、貴い権利をむだにしてはいけないよ。」

「はい。」

「考^{かん}えてごらん、これまで私^{わたし}たちの代^{だい}表^{ひょう}として選^{えら}んだ代議士^{だいいぎし}が、ほんとうに、私^{わたし}たちの身^みの上^{うえ}を思^{おも}つてくれたといえるかい。いいかげんな約^{やく}束^{そく}をして、民衆^{みんしゅう}を踏^ふみ台^{だい}にし、ただ当選^{とうせん}すれば、いいとしたのだ。そして、いよいよ権力^{けんりょく}を持^もつと、自分^{じぶん}たちの都合^{つごう}ばかり考^{かん}えて、大衆^{たいしゅう}は捨^すてられてきたのだ。」

「はい。」

「むつかしいことをいうようだが、わかるだろうね。」と、主人^{しゅじん}は、念^{ねん}をおしました。

「深^{ふか}いことはわかりませんが、意^い味^みはわかります。」と、正吉^{しょうきち}は、返事^{へんじ}をしました。

「それは、選^{えら}んだものにも罪^{つみ}があつたんだよ。人^{ひと}を見^みる目^めがなかつたのだ。ただ、空宣^{からせん}伝^{でん}におどらされたり、山師^{やまし}のようなものにあやつられたからだ。これからは、だまされてはいけないし、強^{つよ}くならなければならん。そして、真^{しん}に、自分^{じぶん}たちのためになり、力^{ちから}のないものの味方^{みかた}になる、正^{ただ}しい人^{にん}間^{げん}を選^{せん}挙^{きよ}するのだ。いままでは、そういうあたりまえのことすらできなかつたが、いよいよそれができる、自由^{じゆう}な時代^{じだい}になつたのを、知^しっているね。」

「はい、自由主義^{じゆうしゆぎ}の時代^{じだい}でしょう。」

「そうだ、自分^{じぶん}が正^{ただ}しいと信^{しん}じたとおりにする、それがなにより貴^{とうと}いことなのだよ。」

「わかりました。それには、自分^{じぶん}がもつと正^{ただ}しく、強^{つよ}いりっぱな人間^{にんげん}となるんですね。」

「そう、そう、前^{まえ}からだれにも、人間^{にんげん}平等^{びやうどう}の権利^{けんり}はあったのさ。それを無智^{むち}と卑屈^{ひくつ}のため、自ら放棄^{みずかほうき}して、権力^{けんりよく}や、金銭^{きんせん}の前に、奴隷^{どれい}となつてきたのだ。」

「親方^{おやかた}、わたしは、いままで、自分^{じぶん}というものをよく考^{かん}えなかつたんですね。」

「それだから、氣力^{きりよく}も、勇氣^{ゆうき}もなかつたのだ。」

「金^{かね}とか、學問^{がくもん}とかいうことより、なによりみんなが正^{ただ}しい考^{かん}えをもつ人間^{にんげん}となることが大切^{たいせつ}なんです。」

「それが民主主義^{みんしゅしゅぎ}なんだよ。」

こうして、正^{しょう}吉^{きち}は、前^{まえ}の主^{しゅ}人^{じん}から、勇氣^{ゆうき}づけられて歸^{かえ}りました。それから、ひまがあれば、選挙候補者^{せんきよこうほしや}の演説^{えんぜつ}を聞^きき歩^{ある}くことにしました。選^{えら}ぶには、まず、その人^{ひと}を知らなければならぬからです。まだ世^よの中^{なか}のほこりに汚^{けが}されぬ若者^{わかもの}の感^{かん}覚^{かく}は、何人^{ひとびと}が心^{こころ}にもないうそをいったり、あるいは、飾^{かざ}らず真実^{しんじつ}を語^{かた}るか、また謙遜^{けんそん}であつて、信用^{しんよう}するに足り^たるか、どうかということを、目^めで見^みわけ、耳^{みみ}で聞^ききわけたのでした。そして、ごまかしの誘惑^{ゆうわく}や、一時^じの宣^{せん}伝^{でん}にとりことなるのを警^{けい}戒^{かい}し、自己^{じこ}の信^{しん}ずる人^{ひと}に投^{とう}票^{ひょう}しようとしたのであります。

そうするうちに、いよいよ選挙日となりました。おりしも、春のいい季節であつて、
 正吉らの投票場は、近くの小学校にきめられました。彼は、午前のうちに
 出かけ、多くの人たちとともに、列をつくつて並んだが、その長い列は、えんえんとして、
 さながら長蛇のごとく、運動場の内側を幾巡りもしたのであります。
 おおぞら 大空の雲の色は、柔らかに、吹く風も暖かでした。どこからか、きりの花の甘い香
 が流れてきました。あちらにある物置の軒端へ、すずめが巢を造るとみえ、たえず往
 来していたが、飛んでくるすずめは、わらくずや、糸きれのようなものを食べていて、
 彼らは、壁板の壊れた穴から、出たり、はいったりしていました。
 「もう、田舎も春だろうな。」と、正吉は、紫色を帯びて、かすみたつ空を仰ぎ
 ました。考えるともなく、子供の時分が、頭の中へよみがえったのであります。
 かげろうの上る、かがやかしい田畑や、若草の芽ぐむ往来や、隣家の垣根に咲く桃
 の花や、いろいろの景色が浮かんで、なつかしい思い出にふけると、あのきれいな鳥が田
 圃の中のかき木にきて止まったのが、まだ昨日のことであるように、いきいきと思い返
 されるのです。

「あの後は、町の鳥屋でも、あんな鳥を二度と見たことがない。なんという名の鳥だった

ろうな。」

彼は、いまでも世界のどこかに、同じ鳥がすんでいるだろうとは思っているが、なんとなしに、またと見られぬようなはかなさを感じるのです。そして、そのため自分は木から落ち、びつことなつたにかかわらず、その苦痛は忘れられて、ただ美しい鳥に対し、限らないとしさと悲しみがつのるばかりでした。

「あのとき、もち棒があれば、とれたかもしれぬ。」

くちおしく思うけれども、また、子供の時分のこと、よく飼う方も知らぬから、殺せばかわいそうだったとも考え、かえって逃げたのを喜ぶ心にもなるのです。彼は、しばらく列の中に立ちながら、夢を見る気で空想をつづけると、ふいに、空から、ひらひらと、花びらの落ちるように、一ぴきの黒いちようが降りて、そばの砂の上で体を休めたのです。

「花のない、人間ばかりのところへ、どうして、ちようが、飛んできたのか。」

自然界には、想像もつかぬようなことがあるものだと思います。正吉は、いまでは子供のときとちがって、めずらしいからといって、すぐ手を出して、捕まえようとはしませんでした。そのかわり、おちついて、色や、姿をよく観察する機会を与えられ

たのを喜び、ちようの羽はねについている模様もようまで、つくづくとながめたのでした。

「なんという、不思議ふしぎな、きれいなものだろう。神さまの力ちからでもなければ、つくれぬものだ。」

一ぴきの虫むしでさえ、子細しさいに見れば、見るほど美しいのを知りました。はじめて、それに気がつくと、雲くもも、花はなも、すべてがおどろくばかり美しかったのであります。

「いいな、自然しぜんは！」と、彼かれは、眠りから目がさめたごとく、感嘆かたんしました。

ひとり自然しぜんが美しいばかりでなかった。こうして、見み、考かんえ、喜よろこび、希望きぼうをもつ、人間にんげんがまた偉大いだいであり、貴とうとい存在そんざいであるのを知りました。さらに、人間にんげんの一人である、自分が尊じぶんいものであるのを知ったのです。

正吉しょうきちは、選挙せんきよに一票ひょうを投じてから、社会人しゃかいじんになれたという、強い自覚じかくをもつと同時に、自然しぜんの觀察かんさつから、また仕事のうえにも大なる自信じしんを得ました。

「おれのいままでの仕事しごとは、みんなうそだったぞ。」

彼かれは、自分の部屋へやへもどると、大声おおこゑで叫んだのです。そして、考かんえたのでした。

田舎いなかから、町まちへ出て、縫ぬい箔屋はくやへ弟子入りでしいをして、そして、習ならった細工さいくは、すべて魂たましいの入はいらない、ごまかしものだった。たとえば、帯おびや、羽織はおりや、着物きものにしろ、刺繡ししゅうをしてで

き上^あがつた、花^{はな}や、ちようや、鳥^{とり}は、ただひな形^{がた}に似^にせたのであり、絵本^{えほん}から写^{うつ}したものであるから、死^しんでいて、生^いきている姿^{すがた}でなかつた。そればかりでなく、品物^{しなもの}の使^{つか}い道^{みち}がまた死^しんでいた。というの^は、金持^{かねも}ちの奥^{おく}さまや、令嬢^{れいじよう}がたが着^きるためであつて、ただそうしたおしやれの人^{ひと}たちの虚栄^{きやうぎ}心を満^{まん}足^{ぞく}させるに役立^{やくだ}つただけだつた。そう思^{おも}うと、たとえ自^じ分^{ぶん}の芸^{げい}は未熟^{みじく}ながら、考^{かん}えずにいられようか、平^ふ常^{だん}はたんすや、行^{こう}李^りの中^{なか}へしまいこまれて、お氣^きにいらなければ、そのま^むま虫^{むし}にくわれ、永^{えい}久^きに捨^すてられるのである。だれしもそうと知^しれば、良^り心^{しん}のあるかぎり、自^じ分^{ぶん}の仕^し事^{ごと}に對^{たい}して、あわれみと恥^はずかしさを感じ^{かん}ずるであらう。

つつましやかなる自然^{しぜん}は、正^{しょう}吉^{きち}にふたび、子^こ供^{ども}の時^じ分^{ぶん}のまじり氣^けない無邪^{むじゃ}氣^きさと、勇^{ゆう}氣^きを呼^よびもどしたのでした。それは、正^{ただ}しく生^いきようと希^{ねが}う人^{にん}間^{げん}のもつ、りつぱな精^{せい}神^{しん}でありました。

「おれは、自^じ分^{ぶん}のもてる能^の力^{りよく}が、たとえわずかばかりにせよ、これを発^は揮^{つき}して、世^よの中^{なか}の人^{ひと}々^{びと}のため^に、役^{やく}立^だてよう。」

ふとしたことが、彼^{かれ}の体^{からだ}に長^{なが}い間^{あい}宿^どり、眠^{ねむ}っていた正^{せい}義^ぎ心^{しん}と、芸^{げい}術^{じゆつ}心^{しん}の芽^めを、い

つしよにめぎめさせたのでした。

その後、彼の描いた、さまざまの水彩画や、鉛筆画が、工場の壁にはられました。

そして、素直で特色豊かな絵は、多くの工員たちの間に人気を呼びました。なぜなら、疲れたものの精神にあこがれと朗らかさをあたえることによって、彼らを慰めたからであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「心の芽」文寿堂出版株式会社

1948（昭和23）年10月

初出：「少国民の友 22巻11号」

1946（昭和21）年2月

※表題は底本では、「心《こころ》の芽《め》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

心の芽

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>